

## 2015 合同教研 美術教育 分科会まとめ

### 1. 上川管内 美深町立仁宇布中 茶谷 裕樹

美術も他の教科と同様に「わかって、できたら、面白い」と考え、制作では、マニュアルを作り、描き方を丁寧に指導する。観賞でも、作者や時代背景などを解説する授業を積上げ、興味関心を高めて来た実践の報告である。美術は、他教科では有り得ないほど、様々な力がつく特殊な教科であるが、意外に丁寧な指導はなされていないと感じていることに基づく動きである。

免許外の指導者が、「大好きな美術を、みんなに好きになってもらいたい。」という「願い」でつくる試行錯誤の実践である。自作のオリジナル資料や、「足で稼いだ情報」で子ども達をその「願い」に巻き込んで行く。子ども達はみんな、もっと上手く描きたいと願い、どの子も制作にのめり込んで行く。制作や観賞に留まらず、廊下の掲示から美術館へと足を運ばせる動きまでも目論む。

どこまで何を教えるべきか、「描き方」と「ものの見方」の指導のあり方や、日本の美術の教科書についての議論なども出された。

### 2. 宗谷管内 礼文町立香深中学校 棒田 志帆

素直で感性豊かな子ども達が多い反面、体育が盛んであるが、水彩絵の具の扱いの難しさから、美術に敷居の高さを感じている子どもが多いようだ。しかし、「こんな美しい所に住んでいて、それが当たり前で気がつかない」子ども達に、何とかそれを気づかせたいという「思い」が牽引する、全校一斉に動く写生会の報告である。

この「思い」をさらに、引率の先生達が、「きれいな景色だね！」等と積極的に声かけをしてくれたり、「オレ今回は、〇〇風で描いてみよう。」など、ノリノリで一緒に描いて協力をしてくれる。それを見て子ども達は、「先生より素敵な絵を描きたい！」とやる気を出す。なかなか聞かない素敵な話である。画材の縛りもゆるくして、モチベーションを上げるように工夫しているとのこと。

さらに本町では、町の教員が連携し、学校種を越えて指導する動き、通称「ドリームマッチ」が行われている。この動きの中では、担当することになった近隣の小学校の子ども達が、学校の横の小川の上流で粘土を見つけたというのを聞き、それを採取・水簸して陶土として素焼きの作品を作るという、希有な実践の報告があった。

中学校ではさらに、折角の粘土なので市販のものも混ぜ、釉薬もかけ茶碗を制作。さらに、茶室に礼文の花を生け、水墨画で描いた礼文の花の掛け軸も飾り、お茶会を催す所までやってしまう徹底ぶり。教職員の“和”と、この“ノリ”とが、子ども達の意欲を後押しするのだ。小手先のテクニックではない、教師の「思い」が成せる技であろう。このような生きた実践は今の時代にあっては、大変に貴重なのではないだろうか。ドリームマッチは、島の宝だ。

### 3. 北海道 札幌白陵高等学校 大崎 智尋

日本の美術教育は、創造性や感受性を高めることには力が入っているが、美術史などの指導

に関しては弱く、海外では「常識」とされていることも知らない場合が多いという。今回は、「みんなが知っているけれど、ほとんどが分かってない“ピカソ”の凄さを伝えたい」という教師の熱意が作る観賞の授業の報告である。

昨今、指導者は前面に出ずに側面から児童生徒の支援にあたり、自主的に学習をする動きが大切であるといわれる。しかし、その反面 NHK で放映されている「スーパープレゼンテーション TED」では、一般的には良くないと考えられているプレゼンターの高熱したトークで、プレゼンターのモチベーションが最高潮の時に、聴衆のモチベーションが最高だったというデータが報告されている。熱い想いが聴衆の心を揺さぶるのだろう。前面で引っ張るのか側面の後押しするのか。いずれにせよ、教師の熱意からなるモチベーションは、重要である。

今回の実践では、まず『寿限無』なみのピカソの本名の“つかみ”から入り、年代と共に大きく変化して行く作品の変遷を追って行く。その後、貴重な映像である記録映画を鑑賞する。構図や筆運び・白黒のバランスや発想の仕方…、それらを一発で的確に描く驚異的なデッサン力に魅了されて行く。大人でも見ていられないほど淡々と進む映像を、子ども達は食い入るように見るという。

この観賞のあと、誰も「ピカソみたい！」と言わなくなるという。好きかと問うと「微妙…、でも凄と思う！」と口を揃えて言うようになる。淡々と勧められる授業の様子に押しつけの要素は無い。されど、教師の熱意が子ども達に伝搬し、モチベーションを押し上げているという好例であろう。

#### 4. 北海道 江差高等学校 十河 幸喜

とかく研究会では、文科省が新たに唱えた「新しい実践」の報告が多く、「流行」を追う内容が目につく気がする。しかし、彼の実践は「不易と流行」の二極でいうと、真逆の動きである「不易」を頑固なまでに一貫して追いつけている。「変わっちゃ行けないものを、変わらせないで続ける」ことを使命にしている感じさえさせる。

しかし、そんな彼のスタンスは、決して大上段に構えてはいない。「間違ったらごめんなさい。」「先生方は偉すぎる。生徒の影の親にも気を使え。」と考え、「逆に教わることも多い。」とさえ言う。「だから寄り添う」のだ。「生徒がやりだしたら預ける」のとおり、授業は生徒達が“自己の内面を見つめ”黙々と制作を進め、シーンとしている。チャイム前に準備し、各自が見通しを持って時間が来たら制作をするスタイルは、1年生で躰けると身に付いて、3年生までそれで通るのだそうだ。曰く「授業が一番楽」だそうだ。

デザインは、あえて失敗しやすいポスターカラーを用いて進める。「本来プロセスを意味するデザインは出来上がった形だけではない」と、昨今“正解があり失敗させない指導”が多い中、あえて手間がかかる作業をさせているのである。基礎的技術を初期段階で丁寧に指導し、しつこいまでに制作の段階を踏ませる。「不自由な試行錯誤が自由を生む」と言う。ブレが無いからこそできる、余計に光る「不易」の実践報告ではないだろうか。